

一九、ある宿屋のふとん

小 泉 八 雲

昔、鳥取の町のある至つて小さい宿屋が開業して初めてのお客として一人の旅商人を迎へた。商人は普通以上の親切を以て迎へられた。それは宿の主人はその小さい宿屋の評判をよくしたいからであつた。新しい宿屋であつたが、持主が貧しいから、家具や器物の大部分は古手屋から求めたのであつた。それでも、一切のものはサツパリとして氣もちよく綺麗であつた。お客は飯も旨く喰へ、暖い酒も澤山飲んだ。それから床が柔らかいゆかの上にのべられたので、彼は眠りにつくために横になつた。

ところで暖かい酒を澤山飲んだあとでは、殊に寒い晩で

愛蘭生れの軍醫を父とし希臘婦人を母として、リュウカディア島に生れたラフカディア、ヘルン後の小泉八雲氏は佛蘭西に育ち、米國に流浪し、後に東洋の日本に歸化せしが、三十七年九月二十六日、五十五歳にて歿せり。

床が暖い時には、熟睡するのがキマリである。しかしお客はホンの少しばかりしか眠らないうちに、その部屋のうちの聲の音で起された。同じ間を互に問うて居る子供の聲で、

「兄さん寒からう。」

「お前寒からう。」

彼の部屋に子供の居ることは、お客をいやがらせるかも知れないが、驚かすことはないだらう。それは日本の宿屋には、戸ご云ふものがなくて、部屋ご部屋ごの間には、たゞ紙のふすまがあるだけだから。それで何か子供が暗がり之間違つて自分の部屋に迷つて來たのに相違ないやうにお客に思はれた。彼は何かおだやかな小言を云つた。ホンのしばらく静かであつた。それからやさしい細い悲しげ